

焦点と主格補語の関係

—談話資料による補語顕現率・焦点句形式調査から—

天 野 みどり

0. はじめに

次の例文(1)の ab は、質問とその応答という会話のペアである。

(1) a 田中さんは何人の弟がいますか。 / b 3人です*1。

応答の発話は、質問者が了解している事柄をふまえ、了解していない事柄、つまり問うている値を明らかにするものである。例えば(1)では、田中さんに弟がいるということは質問者に了解されており、その弟の人数が問われている。本稿では、この「了解されていること・問われていること」という意味を説明するために、「前提・焦点」という概念を次のように規定して用いることにする*2。

(2) ある文、例えば、「AがBだ」文や「AはBだ」文の解釈に際して、聞き手に了解されていると仮定された、変項Xを含む命題<AがXだ>が前提であり、そのXと項がイコールで結ばれる命題<X=B>が焦点である。ある文において前提を構成する要素を前提句、焦点を構成する要素を焦点句と呼ぶ。

(1)bの意味を「前提・焦点」の概念で説明すると、<田中サンハX人ノ弟ガイル>が前提であり、<X=3>が焦点ということになる。(1)bは、述語が焦点句の例である。次の例文(3)bは(1)bと同じようにWH疑問文に対する応答文であるが、焦点句は二格補語である。

(3) a 幾つになったの? / b 21になりました。(資料⑨)

こうした「前提・焦点」構造は、WH疑問文に対する応答文だけではなく、次の例文(4)のように発話を訂正する文にも見いだすことができる。

(4) 渡さんも(ライターが)100円なんですね。いや、違いますよ、ただですよ、これ。(資料④)

(4)の下線部分は、<ライターガ100円ダ>という命題の「100円」をキャンセルして変項とした、<コレ(ライター)ガX円ダ>を前提とし、そのXが「ただ」であることを述べている。この場合は、述語が焦点句である。(以下、この種の文タイプを訂正文と呼ぶ。)

さらに、次の例文(5)a, bは、二つの物事を比較し、どちらが問題とする事柄にとって適当かを選択して述べる文であるが、ここにも、同様の意味が見いだせる。

(5) a 焼けている方が、こう、シャープでいいじゃないですか。

b いや白い方がいいよ。(資料⑥)

この場合、a bともに<Xガイイ>という前提があり、そのXの値としてaは「焼けていること」、bは「白いこと」を述べている。いずれも、ガ格補語が焦点句である。(以下、この種の文タイプを選択文と呼ぶ。)

さて、このように「前提・焦点」構造は様々な文タイプに見いだすことができるが、その際、焦点句がどれかを理解するのに、統語形式は手がかりになっているのだろうか。つまり、焦点句を示す機能を積極的に果たす統語形式、あるいは焦点句であることが多い統語形式というものはあるのだろうか。これまでの研究では、特に助詞「が」に焦点を明示する機能がある、あるいは、ガ格補語が焦点句であることが多いといった指摘がなされているが、それは妥当なことなのであろうか。本稿では、実際の会話を資料として、どのような統語的要素が焦点句となっているかを調査し、特にガ格補語と焦点句との間に密接な関わりが認められるかどうかを検討する。また、調査の結果をふまえ、焦点という概念が言語システム上のどのレベルの事象を説明する概念であるのかを再考する。

1. 焦点と、助詞「が」・主格補語との関係についての先行研究

上述の例文においても、焦点句になる統語的要素は述語であったり二格補語やガ格補語であったりと、様々であった。さらに、文全体や副詞的な句が焦点句である場合もある。そのような多様なあり方の中で、ガ格補語が焦点句である場合は、他の場合に比べて質的あるいは量的に卓越しているとされることがある。

質的な違いを述べるものに野田(1996)や菊地(1996)(1997)がある。野田(1996)は、①他の格助詞とは異なり、助詞「が」だけに、焦点表示専用のものがある。

②助詞「を」や「に」の付いた句が焦点句となるのは、強く発音するなどの音調による。とし、「が」に格助詞の「が」ととりたて助詞の「が」を認めている。これに対する反論は天野(1998)で行われており、この点に関する本稿の立場は天野(1998)を引き継ぐ*3。

本稿で問題にしたいのは、次のような、焦点表示に関する「が」と他の助詞との間の、量的な違いに関する指摘である。例えば、菊地(1996)(1997)は、助詞「を」「に」等にも焦点表示用法はあるが、「が」の場合の方がその用法の「確実度」が高いと述べている。菊地(1996)(1997)はその理由を「が」が「主語」をなす格助詞であるためとしている。つまり、他の格助詞は多くの場合<中立叙述>的な用法であって、焦点表示用法は少ないのに対し、「が」の場合は、主語の名詞句が主題化されて「は」を伴うことが多いために、<中立叙述>用法の「が」がいわば限られた場合にしか使われず、結果的に焦点表示用法の頻度が(他の格助詞に比べて)高くなると見られるとしているのである*4。また、天野(1998)は、質的には、助詞「が」も他の格助詞と同様に固有の機能としての焦点表示機能は持たないとした上で、量的には、ガ格補語が焦点句となることがワ格補語や二格補語が焦点句となることよりも多いのではないかと予測している。そして、

それは、「が」が主格表示機能を有する助詞であり、格の中で主格が最も「際だち」性を持つことに基因するのではないかと予測している*5。

こうした菊地(1996)(1997)や天野(1998)の論考は、ガ格補語が他の補語に比べて焦点句である割合が高いという、量的な違いを述べたものであるが、いずれも予測の域を脱していない。実際にそのような違いがあるかどうかは調査によって検証されるべきであり、その上で、ガ格補語が主語あるいは主格であることと焦点句であることとの間の関係性が考察されるべきである。本稿は、質的には「が」に固有の焦点表示機能を認めない天野(1998)の立場に立ち、量的違いについて、その有無を調査・考察する。問題点は以下の三点である。

問題【1】ガ格補語(助詞「が」が明示されない場合やとりたて助詞「は」「も」等が付いたものも含む)は、他の必須補語に比べて、焦点句である率が高いのか。

問題【2】助詞「が」の明示された句は、助詞「を」「に」などが明示された句に比べて、焦点句である率が高いのか。

問題【3】焦点と、主語・主格であることとは関係があるのか。

2. 調査方法

実際の会話においては、どの要素が焦点句であるのかという解釈が常に一義的になされるわけではない。なぜなら、今会話で何が問われているのか、つまり、前提があるのか、その前提は何なのかという意味が明示されるとは限らず、その解釈が会話参加者の推論にゆだねられる場合があるからである。0.であげた、WH疑問文に対する応答文・訂正文・選択文は、それが明確な場合なのであり、多くは次の例のように解釈者によって判断が異なってくる種のものである。

(6)a [マッサージが好きだという話題に続き] 凝るの？

b 首がね 曲がないんですよ こうやって右に。(資料②)

(6)bは、その直前の発話aが<体が凝りやすいのかどうか>を尋ねていると解釈すれば、b全体がその応答にあたる焦点句ということになるし、さらに踏み込んで<体のどこが凝るのか>が問われていると解釈すれば、「首が」が焦点句ということになる。

また、次々と情報が連鎖状に述べられる実際の会話では、一文に一つの焦点句といったような固定的な現れではなく、異なるレベルの前提に対する焦点句が重層的に現れてくる。例えば(6)も<体のどこが凝るのか>という問いに対しては「首が」が焦点句となり、それと同時に<どのように凝るのか>という問いに対してはそれに続く「曲がないんですよ こうやって右に」の部分もあわせて焦点句となっていると考えることができる。また、「こうやって右に」の部分は「首がね曲がないんですよ」という発話から相手は<どのように首が曲がらないのか>という問いを抱いているだろうと想定し、それに対して発せられた焦点句であると考えられることもできる。

このように、実際の会話は複雑な「前提・焦点」構造をなしていると考えられ、本稿

の目的を遂行するために当該の要素が焦点句であるかどうかを一義的に判定するのも極めて困難な作業である。そこで、本稿では次のような方法による二つの調査を行うことにした。

調査① どのような必須補語がどれぐらい顕現するかを調べ、その比率を比較する。

調査② WH 疑問文に対する応答文・訂正文・選択文において、焦点句がどのような統語形式で現れるかを調べる。

実際の会話では、動詞から予測される必須補語が顕現しない場合が多い。顕現しない要素が焦点句であることはありえないので、顕現する量を調べれば焦点句である可能性の最大値がわかる。実は、わざわざ顕現するという自体、焦点句である可能性が高いので、顕現率を比較することは焦点句となる必須補語の傾向を見る指針としてある程度有効なはずである。これが①の調査である。また、焦点句がどの要素であるかを明確に判断できる文タイプに限定して、その焦点句の現れる統語形式を見るのが②である。①②ともに、テレビのトーク番組を録音して作成した資料を用いて調査することとする*6。

3. 調査①談話における必須補語の顕現率調査

3.1 先行研究と本稿の調査の方法

談話資料を基にして必須補語の顕現率を調査したものに福島(1996)がある。福島(1996)は、有対自動詞(対応する他動詞を持つ自動詞)・有対他動詞(対応する自動詞を持つ他動詞)に限った調査であるが、その結果、有対自動詞は、のべ517例中ガ格補語の顕現数が196例でその顕現率は37.9%、有対他動詞は、のべ233例中ガ格補語の顕現数が10例でその顕現率が4.3%、ヲ格補語の顕現数が101例でその顕現率が43.3%だということである。有対自動詞と有対他動詞を合わせたガ格補語の顕現率は27.5%である。また、一動詞あたりの顕現する必須補語数は、一他動詞あたり0.7弱、一自動詞あたり0.62だということが明らかにされている。

この調査から、予測される必須補語が一つであっても二つであっても、実際には一つの動詞あたり一つの必須補語が出てくるかこないかという程度であること、ガ格補語の方がヲ格補語よりも顕現率が低いということがわかる。この結果からだけでも、ガ格補語の方がヲ格補語よりも焦点句であることが多いとは言えないのではないかと予想される。

本稿では、動詞文・形容詞文・名詞文の全て(主文と補文を含む)について、その必須補語の顕現率を調査する。個々の動詞・形容詞の必須補語の認定は寺村(1982)に基づき、例示されている計554の動詞・形容詞の他は、その記述を参考にして独自に認定した*7。

例えば次の例文(7)の「もらう」という動詞の予測する必須補語は、<ガ格補語・ニ(カラ)格補語・ヲ格補語>であり、実際に顕現しているのは、ニ(カラ)格補語(「佐野さんから」)とヲ格補語(「アンプを」)で、いずれも格助詞の付いた形での顕現である。

(7) この間、佐野さんから あのー アンプを もらいました。(資料①)

次の例文(8)の「持たす」の必須補語は<ガ格補語・ニ格補語・ヲ格補語>だが、実際に顕現しているのはヲ格補語（「おべんと」）のみで、助詞の付かない形での顕現である。

(8) そいで 6時すぎに おべんと 持たして、… (資料②)

なお、調査の結果、ニ格補語・ト格補語は、それを必須補語とするかどうかの判断が困難であり、その判断によって結果が大きく変わってしまうこと、いずれも全体数が少ないことから、必須補語のうちガ格補語とヲ格補語のみを考察の対象とすることにする。

3.2 調査結果

動詞文・形容詞文・名詞文ごとに各必須補語の顕現率をまとめたのが次の表1～3である。この顕現数には、格助詞付きの形・とりたて助詞付きの形・助詞の付かない形のすべてが含まれている。顕現率とは、用いられている述語から各必須補語の出現予測総数を求め、そのうち、実際に出現した数がどれくらいかを示したものである*8。例えば資料①では動詞文全数が100であり、ガ格補語の出現予測総数は100となる。そのうち顕現したガ格補語数は26であるから、ガ格補語顕現率は26/100で26%ということになる。

表1 動詞文の必須補語顕現状況

資料番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	計
動詞文全数	100	216	93	187	163	146	169	119	121	137	1451
ガ格補語顕現数	26	52	26	62	40	43	42	20	28	31	370
ガ格補語顕現率	26.0%	24.1%	28.0%	33.2%	24.5%	29.5%	24.9%	16.8%	23.1%	22.6%	25.5%
他動詞文全数	57	93	49	98	82	73	87	65	67	61	732
ヲ格補語顕現数	31	49	28	59	43	33	50	33	42	40	408
ヲ格補語顕現率	54.4%	52.7%	57.1%	60.2%	52.4%	45.2%	57.5%	50.8%	62.7%	65.6%	55.7%

表2 形容詞文の必須補語顕現状況

資料番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	計
形容詞文全数	43	56	24	64	72	67	69	30	33	42	500
ガ格補語顕現数	27	27	14	39	34	37	36	9	11	20	254
ガ格補語顕現率	52.9%	43.5%	50.0%	60.0%	38.6%	44.6%	46.8%	28.1%	30.6%	43.5%	50.8%

表3 名詞文の必須補語顕現状況

資料番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	計
名詞文全数	17	53	44	53	42	36	31	23	32	58	389
ガ格補語顕現数	10	28	13	16	8	11	13	7	12	27	145
ガ格補語顕現率	58.8%	52.8%	29.5%	30.2%	19.0%	30.6%	41.9%	30.4%	40.0%	46.6%	37.3%

この表から、動詞文におけるガ格補語とヲ格補語の顕現率を比べると、ガ格補語の顕現率の方がかなり低いということがわかる。動詞文に比べれば、形容詞文・名詞文におけるガ格補語の顕現率は高いが、それでも、動詞文のヲ格補語の顕現率よりは低くなっている。ガ格補語は、他の必須補語と比べて顕現率が高いどころか、むしろ低いということである。

動詞文のガ格補語の顕現率が形容詞文・名詞文のそれよりも低いのは、同じガ格補語でも、それが、述語が要求する複数の必須補語のうちの一つであるか、ただ一つ要求される必須補語であるかの違いの反映と言えそうである。つまり、福島(1996)の調査にもあったように、実際の会話では一述語あたりの必須補語の平均的な顕現数が1ないし0であり、例えば他動詞文のようにガ格補語とヲ格補語の二つが要求される場合には、顕現するとしたらそのうちの一つ、そしてその一つはヲ格補語の方が多いということを示していると思われる。福島(1996)での自動詞文のガ格補語の顕現率のあり方が、本調査での形容詞文・名詞文のガ格補語の顕現率のあり方に近いということも、その裏付けとなろう。

ガ格補語は、例えば主題として了解されている等の理由によって、わざわざ顕現する必要がないという事情の方が、焦点句として顕現しなければならないという事情よりも量的に上回るものと考えられる。例えば次の例文(9)(10)の下線を引いた述語からは括弧内に例として記したようなガ格補語が予測されるが、実際にはいずれも顕現していない。

(9) 何時頃(あなたは)寝るの? / (私が)寝るのは前は9時半頃だったんですけども。やっぱり(寝るのは)11時位になりますかねえ。でもなんにも(私が)しない日は8時でも7時でも(私は)寝ちゃいます。(資料②)

(10) (これは)ものすごい絵ですね。(これは)ナスカの地上絵みたいです。ほう。 / (私は)これしか描けない。 / (絵が)うまいうまい。(資料③)

このようにガ格補語の顕現率は他の必須補語と比べるとむしろ低く、必須補語の顕現率調査から付度する限り、ガ格補語が焦点句である割合が他の必須補語に比べて高いとは言えそうもないことがわかる*9。

4. 調査②「前提・焦点」構造の明確な文タイプにおける焦点句の現れ方の調査

次に、「前提・焦点」構造が明確な、WH疑問文に対する応答文・訂正文・選択文を考察し、その焦点句がどのような形式で表されているかを見てみたい。

4.1 WH疑問文に対する応答文

WH疑問文に対する応答文は総数92例である。各例で用いられた焦点句の形式を多い順に述べると、述語(32例)、文(18例)、名詞(9例)、副詞句(7例)、ヲ格補語(5例)、ガ・ニ・ト(ッテ)・デ格補語(各4例)、カラ格補語(3例)、マデ格補語・連体句(各1例)となる。

最も多かった、焦点句が述語である場合とは次のようなものである。

(11) 何時頃ですか? 帰ってくるの / 帰ってくるのは、お昼頃ですかね。(資料②)

(12) 誰が考えたん？それ／僕です。(資料⑩)

また、焦点句が応答文全体である場合というのは次のようなものである。

(13) 日本書道協会って何なの？／コマーシャルをやっているんです。(資料⑪)

この例は「日本書道協会」が唐突に登場するという文脈であるため、＜日本書道協会が聞き手にどのように関係するのか＞を質問者が尋ねたと考えられ、それに対し、＜自分がその協会のコマーシャルの仕事をしているという関係があるのだ＞ということを文全体で答えているものと考えられる。

次に多い、焦点句が名詞の場合とは、次のようなものである。

(14) 何色がいいですか？／黒。(資料⑬)

こうした例は述語であるとも何らかの補語の無助詞形であるとも客観的には判断できないため、名詞という一類を設定して数値を示しておく。

次に、補語が焦点句である例を挙げておく。

(15) 誰やる？／みんなやる。(＝ガ格補語) (資料⑭)

(16) スポーツって何かやったの？／スポーツは陸上やりました。(＝ヲ格補語) (資料⑮)

(17) 何にならなりたかったの？／俺ね国語の教師にならなりたかったんですよ。(＝ニ格補語) (資料⑯)

4.1の冒頭に示した数値から、WH 疑問文の応答文での焦点句がガ格補語の形式で表されることが多いとは言えず、それよりも目立って多いのは、述語という形式であることがわかる。名詞という一類も、述語の類と「です」の有無で文体差を表し分けているペアであると解釈し、述語の類に含めるならば、92 例中、両類をあわせて 41 例もが述語を焦点句とするということになる*10。

また、上述の例文が示すように、WH 疑問文に対する応答文の焦点句がどのような形式で表されるかは、その先行する WH 疑問文がどのような形式で述べられているかに負うところが大きいように思われる。つまり、変項が WH 疑問文において二格補語で表されれば応答文でも焦点句は二格補語で表されるというように、談話上持ち出された「前提・焦点」の形式がそのまま引き継がれる場合が多いのである。

(18) 何にならなりたかったの？／俺ね国語の教師にならなりたかったんですよ (前掲)
WH 疑問文で表された変項の形式が応答文においても引き継がれて用いられている数を示したのが次の表 4 である。

表 4 WH 疑問文の変項形式の引き継ぎ

WH 疑問文の変項の形式	述 語	副 詞	ニ 格	ヲ 格	連 体	ト 格	デ 格	ガ 格	ヲ 格	名 詞	マ ダ
	句	補	補	句	補	補	補	補	補	補	補
	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語	語
その数	24	20	11	9	8	5	5	4	2	2	2
応答文の焦点句が同じ形式の数	16	10	4	5	1	4	3	1	1	1	1

WH 疑問文に対する応答文 92 例の焦点句のうち、47 例が先行文と同じ統語形式を引き継ぎ、全体の 51.2% を占める。異なる統語形式に変更して焦点句が表現される場合、多い順に、例文(13)のような文の形式 (18 例)、例文(12)のような述語の形式 (12 例)、例文(14)のような名詞の形式 (7 例)、ガ格補語 (3 例)、カラ格補語 (2 例)、ヲ・デ格補語・副詞句 (各 1 例) である。

WH 疑問文に対する応答文では、その焦点句を表すのにある一つの統語形式を選ぶというよりも、先行する WH 疑問文で変項を表す統語形式と同じものを引き継いで用いるという方策がとられ、引き継がないで変更するとしたら、文全体や述語で表すように変更することが多いと言える。

4.2 訂正文

訂正文は総数 31 例である。その焦点句の形式を多い順に述べると、述語 (14 例)、名詞 (6 例)、二格補語 (3 例)、ガ・ト (ツテ) 格補語 (各 2 例)、デ・カラ格補語・副詞句・文 (各 1 例) である。また、訂正文においても、訂正するもとの文における変項の形式と焦点句の形式が同じものは 18 例で、全体の 58.1% にあたる。

(19) 巨人ファンだったの？ / いえ。僕、ヤクルトファンですから。(資料③)

やはり WH 疑問文に対する応答文の場合と同じように、既に談話に持ち出されている統語形式を変えずに用いるという原理が第一に働いていると考えられる。変更する形式として何が多いかは、全体数が少ないために判断できないが、多い順に述べると、名詞 (5 例)、述語・ガ・二格補語 (各 2 例)、副詞句・ト (ツテ) 格補語 (各 1 例) となる。ここでも、ガ格補語がとりわけ焦点句として選ばれることの多い形式であるとは言えないことがわかる。

4.3 選択文

選択文は、①「～の方」②「～のうち」という表現を用いている文であることを認定の基準とし、総数 23 例を得た。その焦点句の形式は、ガ格補語 (21 例)、ヲ・二格補語 (各 1 例) であり、ほとんどがガ格補語である。

(20) やっぱり真空管の方がまだいいのかな。(資料①)

(21) ふられたことの方が多いの？ (資料⑤)

(22) やっぱり、ちょっと高いんですけど、そっちの方を選びますね。(資料①)

しかし、そのガ格補語を焦点句とする 21 例のうちの 15 例が「～方がいい」という表現である。複数の候補を比較して一つを選択するという意味を表すのに、「～方がいい」という表現がパターン化していると言ってもよさそうである。また、「いい」以外にもこの種の意味を表すには形容詞文が多用されている。全ての例のうち動詞文が 2 例、名詞文が 1 例であるのに対して、形容詞文は 20 例である。可能性としては例 (22) のように動詞が用いられてもよいはずだが、実際にはほとんど用いられていない。つまり、選択文という文タイプにおいては、ガ格補語を焦点句とする数が多いのは確かだが、それは、

ガ格補語しか必須補語を要求しない「いい」をはじめとした形容詞が多用されることの、必然的な結果なのである。他の必須補語と比較してガ格補語が多いというわけではない。

選択文は、これまでに見た WH 疑問文に対する応答文や訂正文とは異なり、その一文だけで焦点句の解釈がしやすいものである。そのため、これまでの文法研究で助詞「が」が焦点表示機能に関して卓越しているという議論がなされる際には、このタイプの文を念頭に置きやすかったのではないだろうか。選択文でガ格補語が焦点句となることが多いとしても、それは形容詞文が多いことの現れであるし、選択文は、様々な「前提・焦点」構造の文のうちの一部であるに過ぎない。また、量的にもその使用数が少ないことは、実際の会話の調査から明らかである。従って、選択文の結果を全ての「前提・焦点」構造の文に一般化することはできないし、むしろ、様々な必須補語の出現する 4.1、4.2 の結果を重視するべきであると思われる。

5. 二種の調査のまとめ

3. と 4. で述べた調査①②から、1. に挙げた問題【1】<＝ガ格補語（「が」の明示されない場合やとりたて助詞「は」「も」等が付く場合も含む）は、他の必須補語に比べて焦点句である率が高いのか>に関しては、その率が高いとは言えないことが明らかになった。選択文の場合に見かけ上その率が高いのも、その文タイプに形容詞文が多用されることの必然的な結果である。

次に問題【2】<＝助詞「が」の明示された句は、助詞「を」「に」などが明示された句に比べて焦点句である率が高いのか>について考えてみたい。菊地（1996）（1997）は、ガ格補語が主題となることが多い分、相対的に中立叙述の用法よりも焦点句となる用法の比率が高くなると予測した。菊地（1996）（1997）の主張は、格助詞の機能についてである。そこで、調査①の結果得られた必須補語顕現数のうち、助詞「が」が明示された句の顕現数のみを数えてみると、動詞文・形容詞文・名詞文をあわせて 200 例を得た。そのうち、調査②の結果、焦点句であると認定されるものを数えると、WH 疑問文の応答文・訂正文・選択文をあわせて 21 例であり、これは助詞「が」の明示された句全体（200 例）の 10.5% にあたる。同様に、助詞「を」の明示された句の顕現数は、全部で 61 例であり、そのうち焦点句であるものは 6 例で、9.8% となる。つまり、それぞれの格助詞の明示された句のうち、焦点句となっている場合の比率はほとんど変わらないのである*11。

以上のことから、問題【3】<＝焦点と、主語・主格であることとは関係があるのか>については、ガ格補語が主語であり、主題となることが多かったとしても、そのために他の必須補語よりも焦点句となる割合が高いという因果関係もないし、また、たとえばガ格補語に「際だち」性があったとしても、そのために焦点句となりやすいという因果関係もないという結論が得られる。

6. 焦点と中核、情報構造と統語構造

以上の結果をふまえ、本稿で用いてきた「焦点」という概念を「際だち」性あるいは「中核」という概念との関わりで再考してみたい。天野（1998）がガ格補語に「際だち」性があると言うときに想定しているレベルは言語の認知的側面である。つまり、世界をどう認知し、どう言語表現するのかというレベルである。尾上（1998）は「一つの事態認識の中核に立つ項目がガ格体言によって示される。これが日本語の主語である。（p.88）」と述べている。言うまでもなく、何を中核と捉えてガ格補語で表すかは、統語構造を決定する問題である。文法論の枠組みで言うならば、格やヴォイスの問題である。

他方、焦点句とは、話し手が聞き手の了解事項をふまえ、変項が何であるかを示す言語表現であり、情報構造の問題である。本稿の調査から、焦点句としてどのような言語形式を選択するか、つまり情報構造をどのような言語形式で実現するかは、統語構造の決定からは独立した問題であることが明らかである。焦点句であることを明示するには、例えば述語が要求する複数の必須補語のうち焦点句となる必須補語だけを顕現させ、残りを言わないでおくとか、先行する発話で表現されている変項の形式と同じものを用いるといった、統語構造の決定とは独立した原理に基づいた方策が用いられている。これらは、世界をどう認知し、どう表現するかというレベルで選択された統語構造を維持したまま焦点を表現するための方策と言ってもよいだろう。

このように、焦点表示は情報構造のレベルに属する問題であり、これは統語構造とは独立したレベルの問題と考えるべきである。井島（1997）は「命題内の格関係が決定された格構造レベルと、主題－解説構造や語順の移動、強勢など情報構造的な加工が加わる情報構造レベルの二つの階層」を設け、「主題のハ」「総記のガ」は格構造に情報構造レベルでの加工が加わったもの、「中立叙述のガ」は情報構造レベルでの加工が加わっていないものと述べている。そして、そう考えれば、助詞「が」に「総記」「中立叙述」の二つの機能を認めることは不適當であり、格構造のレベルで認められる機能の他に、「情報構造的な要請として“総記”というような擬似機能がガにあるかのように見える」だけであるとしている*¹²。さらに、

①天野（1998）が名詞述語文の「が」の前項・後項のどちらも焦点句となる可能性があることから、質的に「が」に焦点表示機能があるわけではないとした結論

②本稿での実際の使用例調査によって得られた、助詞「が」の焦点表示の卓越性が量的な面でも否定されるという結論

上の①②から、そうした「擬似機能」ですら、助詞「が」にはないということが言える。

7. おわりに

本稿では、ガ格補語が焦点句となることが他と比べて量的に卓越しているわけではないことを、実際の会話資料を用いて明らかにした。

日本語の助詞「が」は焦点表示機能を持っているわけではなく、焦点マーカーと記述されるのが適当ではないことは他の格助詞と同様である*13。助詞「が」は事態の何を中核として捉えるかを示し、その機能は統語構造のレベルに関わるものである。その、事態の中核を示す機能が、同時に、焦点を示すのに有効だといった因果関係はない。助詞「が」の選択を支配する原理と焦点を示す形式の選択を支配する原理とは別々のものである。「前提・焦点」という情報構造上の意味は、統語構造のレベルとは独立に、様々な統語形式の上にかぶさるようにして表されるものなのである。

情報構造を論じるのに実際の言語使用を考察することは重要と思われるが、そのような研究は十分にはなされていない。本稿では客観性を得るために「前提・焦点」が明確に判断できる例に限って考察したが、実際の会話における「前提・焦点」構造の現れは、会話の進行とともに連鎖的・重層的に展開される、より複雑なものである。そうした言語事実に取り組むことによって談話における「前提・焦点」構造の全体が解明されることになるのであり、本稿の考察はその端緒に過ぎない。

注

- *1 例文中の記号「/」は、発話者の交代を表す。
- *2 本稿で用いる「前提・焦点」という概念と似たものに「旧情報・新情報」「既知・未知」という概念がある。それらの概念の違いや問題点の指摘は西山・上林(1985) pp.41-48, 井島(1990) pp.20-23, 同(1997) pp.50-57, 天野(1998) pp.68-69を参照のこと。
- *3 野田(1996)は、次の例文(i)の下線を引いた「が」は主格を表す働きを持たず、排他的な意味だけを表すとし、「格助詞」ではなくて「とりたて助詞」として扱っている。
- (i) 神戸の方がいい店がある。
- そして、このような働きは他の助詞「を」「に」にはないとする(pp.15-16, pp.230-237, pp.276-277)。同様に、菊地(1996)(1997)も焦点句となる場合の「が」を「係助詞/取り立て助詞的」(傍点筆者)とし、(i)の下線部分の種の「が」はいわば既に格助詞性を欠いて「解答提示」に徹した用法であるとしている((1996) p.6, p.12, 注10(1997)注14)。これに対し、天野(1998)は主張の依拠する言語事象「AがBがC」型の文が成立するには「BがC」の部分が意味的に「A」の性質を表している必要があることから(i)の下線部分の種の「が」も主格表示と見なす方が妥当であるとする(p.78)。また、野田(1996)は「ぜひ私にやらせてください」のように他の格助詞が排他的な意味になるのは強く発音するといった音調によるものであるとしているが(p.277)、天野(1998)ではこうした音調の有無が「が」と他の格助詞の違いによらず、どれだけその句に対比性があるかによっていると述べ、この点からも、焦点表示に関する「が」と他の助詞との質的な違いはないものとしている(pp.77-78)。
- *4 菊地(1996)注10, (1997)注23。
- *5 天野(1998)注14。
- *6 調査①に用いた資料は'97.4～'98.9に放映された番組から得た計10種で、資料③「ごきげんよう」、資料④「さんまのまんま」、残りの8種が「笑っていいとも」である。調査②に用いた資料は資料①～⑩と'98.7～9に放映された番組から得た資料⑪～⑮を加えた計15種で、資料⑪「笑っていいとも」、資料⑫⑬「資生堂おしゃれカンケイ」、資料⑭「電リク野郎 ELVIS」、資料⑮「はなまるマーケット」である。
- *7 「～(ら)れる(受身)・～(さ)せる(使役)・～てもらう・～てくれる」は一つの動詞相当とみなした。また、「～たい」は一つの形容詞相当とみなした。

- *8 形容詞文のヲ格補語は資料③に1例(顕現率100%)資料④に2例(顕現率100%)が見られたが、少数であるため表には載せていない。また、名詞文にヲ格補語は無い。
- *9 なお、この結果は書記言語を資料としても変わらない。「100人の20世紀」『朝日新聞』(1998.4日刊記事)を資料として調査した結果、動詞文のガ格補語の顕現率が51.2%(164例中84例)、ヲ格補語の顕現率が84.0%(94例中79例)、形容詞文・名詞文は総数が少ないため参考にとどまるが、ガ格補語の顕現率がそれぞれ77.8%(9例中7例)・50%(32例中16例)である。
- *10 ちなみに、形式的にはYes-No疑問文であるが、意味的にWH疑問文と同じように解釈され、その応答文で焦点句が比較的明確に判断できる15例を見ても、その焦点句の形式は多い順に名詞(5例)、述語(4例)、ガ格補語(2例)、ヲ・ニ・ト(ッテ)格補語・文(各1例)となる。
- *11 助詞「が」の句の方が助詞「を」の句よりも焦点句となる率が若干高いが、その数字の中には、ガ格補語しか要求しない形容詞文をそのほとんどの例とする、選択文の数が入っていることに注意されたい。
- *12 井島(1997)p.62。
- *13 Lambrecht(1994)は日本語の「が」を「格」マーカーではなく、「焦点」マーカーと記述した方がよいと述べている。p.223, p.355注11。

引用文献

- 天野みどり(1998)『「前提・焦点」構造からみた「は」と「が」の機能』『日本語科学3』国立国語研究所
- 井島 正博(1990)「文の類型と事態の類型」『山梨大学教育学部研究報告』40
- 井島 正博(1997)「情報構造の表現機構」『成蹊国文』30
- 尾上 圭介(1998)「主語(3)」『日本語学』17:1
- 菊地 康人(1996)『「XがYがZ」文の整理—「XはYがZ」文との関連から—』『東京大学留学生センター紀要』第6号
- 菊地 康人(1997)『「が」の用法の概観』『日本語文法 体系と方法』川端善明・仁田義雄編、ひつじ書房
- 久野 暁(1973)『日本文法研究』大修館書店
- 寺村 秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版
- 野田 尚史(1996)『新日本文法選書1 「は」と「が」』くろしお出版
- 福島 直恭(1996)「談話における自動詞と他動詞の現われ方に関する一考察—有対動詞の顕現する格成分及び活用の種類について—」『国語国文論集』25 学習院女子短期大学国語国文学会
- Lambrecht, Kund. (1994) *Information structure and sentence form*. Cambridge University Press.

(あまのみどり 和光大学・人文学部)